

吉田方歴史探検

しかすが

吉田方小学校の総合学習の時間は、「しかすがの時間」と名付けられています。「しっかり・かんがえ・すすんで・がくしゅう」という願いもありますが、もう一つの理由は昔、この地域一帯が「しかすが」と呼ばれていたことからきています。昔のしかすがは、どんな様子だったのでしょうか？

私たちの住む豊橋地方は、昔は、東海道が通り、旅人の行きかうにぎやかな所でした。豊川には、800年ほど前まで橋がなかったので、いまの小坂井町平井あたりから、対岸の豊橋市今橋に船で渡りました。

そのころの渡しの川幅は、四キロメートルもありました。中にはたくさんの島があり、その島をつたわって行ったそうです。都へ荷物を運ぶ人たちは、強い風がふいたり、水がふえたりすると川を渡ることができなくなり、何日も渡れる日を待ったとも言われています。人々は、この豊川の渡しを、平安時代の初めごろから、志香須賀（しかすが）の渡しというようになりました。志香須賀の渡しは、日本の名勝として有名になり、都の人々にも知られ歌に詠まれ宮中のびょうぶにもえがかれしました。後に清少納言が枕草子で「渡りはしかすがの渡 こりずまの渡 みづはしの渡」と詠むほどの名所になりました。



牛車通学

校区の西部にある、吉前町、神野新田町、富久縞町、青竹町に住む児童は、バス通学をしています。バスがなかったころはどのように通学していたのでしょうか？



1902年、それまであった神野小学校がなくなり、そこに通っていた子どもたちは、牟呂小学校へ通っていました。1912年には、五号（ごごう・神野新田町の北部）一帯は、吉田方校区になりました。ですが、学校が遠いので、雨の日には学校を休む子も多く、また家の手伝いで欠席する子もいました。校長先生や五号、吉前の人たちは何とかして子どもたちがきちんと通学できるようにしたいと話し合いました。そうして考え出されたアイデアが牛車通学だったのです。そこで、牛車に乗って通学することとなりました。雨の日には、牛車に屋根をつけてバスのようなものにしました。牛車には低学年が乗り、中学年以上は歩いて通学していました。牛車通学は、1961年、吉前五号線のバスが開通するまで続けられました。

